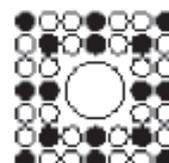


Newsletter of the British Council Japan Association

BCJA Newsletter

No.36

July, 2020



● お知らせ ●

奨学基金への寄付を募ります

BCJA 奨学基金は、BCJA 会員の有志の方々からの寄付金を基盤として、英国留学生の支援活動を着実に進めてきております。今年度も奨学生の募集を行いますので、奨学基金へのご寄付をお願い申し上げます。

(詳しくは、本ニューズレター7ページをご覧ください。)

募金計画

- ◆ 寄付金額: 一口 5,000 円
- ◆ 口座番号: 00180-0-426794 (ゆうちょ銀行)
- ◆ 加入者名: BCJA 奨学基金
同封の振込用紙をご利用くださいませ。

年会費の納入をお願いします

BCJA 運営のため、年会費の納入をお願いいたします。

納入方法

- ◆ 年会費金額: 2,000 円
- ◆ 口座番号: 00180-0-426794 (ゆうちょ銀行)
- ◆ 加入者名: BCJA 奨学基金
同封の振込用紙をご利用くださいませ。

BCJA 役員および執行部を募集いたします！

BCJA の運営のためにご協力いただける方を随時募集しております。Google グループなどで活動も行っておりますので、是非ご連絡ください。

ご連絡先

- ◆ Google グループ URL
<https://groups.google.com/forum/?hl=ja#!forum/bcja-member>

2019 年 BCJA 年活動状況について



BCJA 会長 青柳昌宏

新型コロナウイルス感染の広がりや緊急事態宣言の下で自宅にこもりがちな生活を強いられておりましたが、BCJA 会員の皆様におかれは、いかがお過ごしでしょうか？

BCJA2019 年度の活動について、ご報告させていただきます。

19 年目を迎えた BCJA 奨学金についても、例年並みの応募者数の中から、選考委員会により優秀な 4 名が選ばれ、英国留学に送り出すことができました。残念ながら奨学金への寄付額は、徐々に減少する傾向にあり、BCJA 奨学金制度を維持するためには、寄付金募集の仕組み作り、BCJA 会員数の増加など、地道に取り組む必要があります。幸い BCJA 奨学生独自の OB 組織について、順調に発展しており、定期的会合が英国留学者交流会として開かれております。昨年は、11 月 1 日に東京、渋谷のイタリアンレストランで開催され、多くの BCJA メンバーが参加されました。

今後は、奨学金制度が BCJA 奨学生 OB を主体とした運営に徐々に移行していくことを期待しております。

引き続きご支援をよろしく願いいたします。

(BCJA 年間活動についてのお問い合わせは、masa_aoyagi5@yahoo.co.jp までお願いいたします。)

2019年度BCJA英国留学奨学金の審査を終えて

——募金へのご協力に対する感謝とお願い

BCJA 英国留学奨学金審査委員会 委員長 白鳥 令

2019年度も、BCJA英国留学奨学金に対し67名の非常に優秀な方々が応募いただき、その中から、4名の方々に、英国の教育研究機関に留学するための奨学金を差し上げることが出来ました。この1年間、本奨学金に貴重なご寄付をいただきました方々に、心から感謝申し上げます。

使い道は自由ですが、1名に対する奨学金の額は15万円という少額のこの奨学金が、これ程優秀な方々から多数の応募をいただいているのは、この奨学金のこれ迄の授与者が非常に優秀な方々で、BCJA英国留学奨学金そのものに高い評価が与えられ、英国のいくつかの大学でもこの奨学金の獲得者に授業料減免の措置をしたり、他の財団などがこの奨学金の授与者に追加の奨学金を授与したりしているからでしょう。

今回のBCJA英国留学奨学金の授与者をご覧になると、応募者のレベルでもそうなのですが、授与者が例年より一段と上の素晴らしい方々であることが、お分かりいただけだと思います。アニメ制作者の副島しのぶさんは立体アニメーション映像制作の分野ですすでに有名な方ですが、特に日本やアジアの文化をアニメの世界で位置づけをしようとされて今後は期待される作家であり、名古屋や北海道で医師をされている清水一紀さんは医学と行政学を結び、保健政策を財政面も含めてグローバルな視点から研究されようとしています。また、小児外科医の渋谷聡一さんは国際的に多数の論文を発表されて現在英国で活躍中であり、詩と映像制作を専門とする曾我英子さんは、芸術と社会科学を結んだ視点でアイヌ文化等を題材とする展覧会を日本や英国で開催、多くの賞を受けています。

しかし残念なことですが、本年は資金が足りなかったために、予定をしていた5名の方々に奨学金を差し上げることが出来ず、1名減らして4名の授与となりました。BCJA英国留学奨学金は、かつて英国政府の奨学金(British Council Scholarship)を受けて英国の教育研究機関で学んだり研究したりした人々を中心となって、英国政府が高度成長後の豊かになった日本を英国政府の奨学金(British Council Scholarship)の対象国からはずす決定をした時に設立されました。日英の学術文化の交流関係が弱くなるのを恐れてのことでした。現在も、広く英国留学の経験のある方々によって組織されているBCJAにより、その会員からの貴重な寄付を財源の中心として、運営されています。ただ、かつて英国に留学した人々の高齢化が進んだことや、昨今の日本の経済界の社会貢献から撤退する風潮などの影響で、運営に困難性が增大しているのが現実です。

本奨学金の審査委員会も、今後、ウェブからの寄付の受け入れやクラウドファンディングの実施、英国と関係のある企

業や団体への協力要請の強化などを実施して行く予定ですが、BCJAの会員の皆様におかれましても、事情をご賢察の上、ぜひ一層のご支援を心からお願い申し上げます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

BCJA 英国留学奨学金の寄付の方法

- ◆ 寄付金額： 一口 5,000 円
- ◆ 口座番号： 00180-0-426794 (ゆうちょ銀行)
- ◆ 加入者名： BCJA 奨学基金

2019年度奨学金授与者リスト

氏名	出身校/所属	留学先	分野
清水一紀	名古屋大学医学部	London School of Economics and Political Science, London School of Hygiene and Tropical Medicine, Taught Masters	保健政策・保健計画・保健財政
副島しのぶ	ロンドン大学スレードスクール、東京芸術大学大学院	RCA (Royal College of Art), MA	美術 (アニメーション/現代美術/映像)
渋谷聡一	京都府立医科大学	University College of London, Institute of Child Health, Great Ormond Street Hospital, Visiting Researcher	臨床医学、生体医工学
曾我英子	ロンドン大学スレードスクール、オックスフォード大学日産研究所	University of Oxford, The Ruskin School of Arts, DPhil	映像、詩作品制作とリサーチ

2017年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

留学体験記

田中 良法

はじめに

私は、BCJA 奨学制度をはじめとする多くのご支援のおかげで、2017年の4月から2019年の3月までケンブリッジ大学に属する研究機関である Cambridge Institute for Medical

Research (CIMR)にて2年間の研究留学を体験することができました。現在は、愛媛県今治市にある岡山理科大学の獣医学科で生化学講座の助教として、研究及び教育活動に精進しています。本奨学制度には渡英前に応募し、留学中に結果を知りました。留学を始めたばかりで躓くことが多かった私にとって、本奨学生へ採用頂いたことは、非常に有り難たく、とても勇気づけられました。この場をお借りして、BCJAの皆様に厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

留学のきっかけ

私は獣医師になることを目指して獣医学科に入学したため、元々研究者を志していたわけではありませんでしたが、卒業研究を通じて生命科学の魅力の虜になり、大学院に進学しました。学部時代は臨床繁殖学の研究室に所属していたため、生殖内分泌の詳細な機構に興味を持ち、その詳細な機構を研究したいと考えて、実験動物を用いて生殖内分泌の詳細な機構を研究している研究室に博士課程から移動しました。博士課程では、脳の性差に着目して研究を行なった結果同定されたグラニューリン遺伝子を欠損しているマウスの解析を行うことになりました。ただし、グラニューリン遺伝子が認知症の亜型である前頭側頭葉変性症 (FTLD) の原因遺伝子として同定されたため、性差におけるグラニューリン遺伝子の役割を調べるのではなく、認知症の様な神経変性疾患におけるグラニューリン遺伝子の役割を調べることになりました。一対のグラニューリン遺伝子のうち片側のグラニューリン遺伝子に異常があるヒトでは、グラニューリン遺伝子から産生されるプログラニューリタンパク質が減少し、細胞の核に局在するタンパク質である TDP-43 が細胞質に蓄積します。

核タンパク質 TDP-43 の細胞質内蓄積は神経変性の原因の1つと考えられ、FTLD だけでなく、筋萎縮性側索硬化症 (ALS) にも認められる病理です。よって、そのメカニズムの解明は FTLD や ALS の予防や治療を考える上で大きな手がかりになると考えられるため、TDP-43 の蓄積に密接に関与しているプログラニューリタンパク質の機能解明は非常に重要でした。私はプログラニューリン遺伝子を欠損したマウス、ヒト培養細胞、患者脳サンプルなどを用いて多角的な解析を行い、プログラニューリタンパク質が、細胞内の消化器官であるリソソームの機能を制御していることを先駆けて明らかにし、リソソームにおけるプログラニューリンの働きが TDP-43 の蓄積を抑制していることを示唆しました。この結果から、細胞内消化が滞りなく進行することが、TDP-43 が蓄積する神経変性疾患の予防や治療に重要であるのではないかと考えるようになりました。

一方で、当時研究を進めていく中で、良いデータが出てインパクトのある雑誌に掲載することができないという悩みを抱えていました。自身の研究が先進的で面白い研究であるということを多くの人に伝えるような論文が書けないことが問題でした。様々な要因があるとは思いましたが、論文にするまでの戦略や英語力が第一線で活躍する世界中の研究者の方々と比較して大きく劣っていると感じていました。そ

こで、研究員としての任期終了が近づいていたこともあり、留学を考えるようになりました。自身の研究の結果から、リソソームを終点とする細胞内消化であるオートファジーの重要性を認識していたため、神経変性疾患とオートファジーに着目して研究している研究室を探したところ、留学先である Cambridge Institute for Medical Research (CIMR) の Rubinsztein 教授の研究室が見つかりました。メールで問い合わせたところ、1時間程で返事を頂き、skype 面接の日程が組まれました。流石に、何処の馬の骨ともわからない無名のポストドクを雇って下さいとは言えなかったので(そんな英語力もなかった)、研究留学助成金を獲得できた場合は研究室に参加して良いか伺ったところ、快諾頂きました。幸運にも研究留学助成金の1つに採用され、渡英することになりました。

研究生活

渡英後は、ケンブリッジ大学のケンブリッジバイオメディカルキャンパス内にある CIMR にてオートファジーの制御機構に関する研究を開始しました。ケンブリッジバイオメディカルキャンパスは質の高い医学研究、患者ケア、及び教育を一所で行う世界でも有数の医学教育・研究拠点です。私が所属した研究室は、英国にありながらも英国人はほとんどおらず、世界中から様々な背景をもった優秀な学生やポストドクが在籍していました。室員の入れ替わりも比較的頻繁に起こりますが、25 人前後が常時在籍している比較的大きな研究室でした。オートファジーの研究は私にとってとても新鮮でした。これまでも培養細胞を使用して研究することはありましたが、細胞の状態に敏感に反応して変化するオートファジーの研究はとても面白く感じました。膜輸送という概念はぼんやりと理解していましたが、実際に自分で研究してみるとそのイメージがありありと感じられ、“感覚”として自分の中に蓄積していきました。1年目は中々言いたいことが言えなかったり、相手が話す内容が理解できなかったりとボスや研究室のメンバーと意思疎通するのに苦労し、研究の方も初歩的な失敗を繰り返すなどあまり良いところはありませんでしたが、後に書くように下宿先の大家さんの家族や友人のおかげで英語力が向上するとともに、面白い結果も出るようになっていきました。

一方で、優秀な同僚が数多く在籍する研究室に参加することができたおかげで、研究室のセミナーで彼らの研究に対するアプローチや考え方を聞くことができたことも非常に勉強になりました。優秀な同僚からも多くのことを学びましたが、やはり最も多くを学んだのはボスである Rubinsztein 教授からでした。データの断片を見ただけで壮大なストーリーを頭の中に描いているような様子で、いつもその洞察の深さに感銘を受けました。適切な表現かわかりませんが、世界を牽引する研究者の「厚み」のようなものを直に感じることもできました。

ケンブリッジでの生活

私はCIMRからさらに南に下った農場がある地域にイングリッシュの大家さん、他数名の下宿人と住んでいました。2年間でコロンビア、イングリッシュ、スコティッシュ、アルゼンチン、南アフリカ共和国、イタリアを出身とする下宿人達と1つ屋根の下で生活しましたが、皆个性的で面白くとも優しい人たちだったので帰国から少し時間が経った今でも印象が薄れることはありません。ほとんど英語ができない時から私を遊びに連れ出してくれ、コミュニケーションを取ろうとしてくれました。特に大家さんには、大変お世話になり、英会話をはじめとして、英国の風習や歴史、政治や社会問題といった真面目なトピックから下世話な話までたくさん話をしました。美味しいケーキやプディング、英国の家庭料理もたくさん頂きました。夏休みには娘、息子家族と演劇を見たり、クリスマスパーティーをしたりしました。研究所内外で知り合った友人たちとも、しばしば夕飯をともにして楽しい時間を過ごしました。私は彼らのおかげで、ケンブリッジで充実した生活を送ることができました。様々な価値観に触れて、視野を広げることができました。研究に対するモチベーションを維持できたのも、彼らに支えられたことが大きかったと感じています。

現在は、日本に帰国し助教として教育に精進すると共に、独立した研究者として研究を展開しています。ケンブリッジで過ごした日々の経験を糧に、教育・研究を通じて世の中に良い影響を与えていけるように精進していきたいです。

(2017年度BCJA奨学生, CIMR, University of Cambridge)

2018年度BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

留学レポート

井上 果歩

はじめに

2015年4月より東京藝術大学大学院音楽研究科の博士後期課程にて、また2017年9月よりサウサンプトン大学人文大学院の博士課程にて音楽学を学んでおります、井上果歩と申します。2018年度のBCJA奨学生に選んでいただきましたことを、心よりお礼申し上げます。

サウサンプトン大学での学び

私はこれまで13世紀のヨーロッパ音楽に興味を持ち、その理論や実践について研究してきました。それ以前の音楽(グレゴリオ聖歌など)が明確な拍やリズムを持たなかったのに対し、12世紀後半になるとパリのノートル・ダム大聖堂を中心に、ラテン語の詩の韻律に由来するリズム・パターンを伴った教会多声音楽「計量音楽」が演奏されるようになり、13世紀になると計量音楽の楽譜や理論書が多く書かれました。その背景として、古代ギリシア・ローマの学問や文学への再評価、大学教育に

おいて音楽が数学四科の一つとして熱心に学ばれたこと、各都市における大聖堂の興隆とそこでの演奏機会の増加などが挙げられます。このように、12世紀後半から13世紀にかけてのヨーロッパは並々ならぬ文化的エネルギーを持っており、計量音楽はその中で一気に花開いたと考えられます。

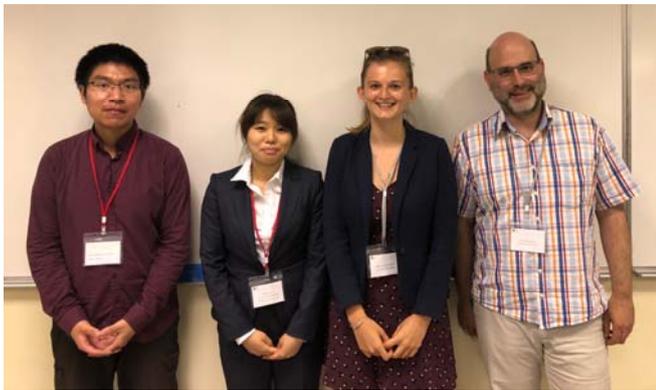


アメルス『音楽技芸の実践』(1271)より計量音楽に関する章(Bamberg, Staatsbibliothek, Lit 115, f. 78v、所蔵機関より掲載の許諾を取得済み)

私がサウサンプトン大学に留学したのは、13世紀の計量音楽の第一人者の先生がその大学にいらっやって、その先生のもとで博士論文を書きたいという思いからでした。また、私が扱う写本資料はイギリスやフランス、ドイツ、イタリアなどにあるのですが、サウサンプトンからならばこれらのヨーロッパ各地の所蔵機関にアクセスしやすい、というのもこの大学を選んだ理由です。さらに、サウサンプトン大学図書館ではインターライブラリー・ローンでイギリス国内やヨーロッパのみならず、アメリカからも無料で図書や論文を取り寄せることができます。加えて、私の所属する人文大学院音楽専攻の博士課程では必修授業も単位もなく、持てる時間は全て研究に費やすことができ、サウサンプトン大学は、自身の博士論文に没頭したいと考えている私にとって、まさに最高の環境であると言えます。

このように言うてしまうと、研究を進めるのに十分な時間があるように思えますが、実際の私の日々の生活は、学会発表や論文の投稿、助成金への応募などで目まぐるしく、何らかの締め切りに追われている、というのが現状です。研究面で最も大変なのは、サウサンプトン大学への博士論文と同時に、東京藝術大学に提出するための博士論文も書かなくてはならないということです。前者の締め切りは今年(2020年)9月末、後者の締め切りは今年10月末と提出期限もほぼ同時で、今はひたすらパソコンに向かって2つの博士論文を執筆しています。そして、留学を通して痛感しているのは、自身は第一に物書きであるべき、ということです。なぜなら、口頭発表であれ論文であれ、研究成果は書いたものが全てだからです。私のサウサンプトン大学の主任指導教員の先生は、

朝7時から11時までの4時間で毎日最低でも500語書くのを習慣にしているとおっしゃっていました。私も、留学してから、日本語なら1日で最大で1万字、英語なら1300語程度書けるようになりました。不思議なことに、書くことを何日間か怠ると、まるで思考回路にしこりができたように、何かを読んだり、考えを巡らせたりすることが億劫になってしまうことに気づきました。そして、自分を奮い立たせるために、このような作業をするときは、「勉強する」や「研究する」という動詞を使うのは避け、「仕事をする」と言うようにしています。なぜなら、こちらの言いの方が、対価として奨学金いただきながら、研究という責務を全うせねばならないことをより身に染みて実感することができるからです。



2018年5月に香港中文大学で行われた音楽学を学ぶ大学院生向けのフォーラムにて、1枚目はサウサンプトン大学の副指導教員と博士課程の仲間と、2枚目は東京藝術大学の先生方と仲間と。私は東京藝術大学とサウサンプトン大学両方の代表として参加しました。

私生活

このように私が自分自身を鼓舞しようと試行錯誤しているの

は、生活の場が、資料調査や学会発表のための渡航以外では自宅に限られていて、鬱屈した気分になりがちだからです。前述のごとくサウサンプトン大学では指導教員との実習を除いては授業がなく、また大学図書館はいつも混雑していて煩く、資料の請求以外ではあまり利用したくないというのが本音で、大学で研究活動を行うことはあまりありません。さらにサウサンプトン大学は、新型コロナウイルスが流行する以前から、ヴァーチャルでの学習環境や学術資料のオンライン購読などに力を注いでおり、自宅にいても十分な学びの機会が得ることができます。ただし、このような生活ではイギリスに留学した意味がなく、人との交流もなく寂しいものになってしまいます。

そこで、まず私が普段の生活で欠かさないのは、ジム通いです。家でのデスクワークが一日の大半を占める私にとって、体を動かすのは大事なことです。サウサンプトン大学附属のジムにはプールやマシンだけでなく、色々なフィットネスのクラスがあります。日本でもヒップホップダンスを習っていたので、こちらでもダンス系のクラスを中心に参加しています。体を動かすだけでも楽しいのですが、それ以上に嬉しいのが人との出会いです。ジムには学生だけでなく、職員や地域の人々も通っており、国籍も年齢も様々です。常連や顔見知りの人との他愛もない世間話も、ストレスの解消になります。

また、週に一度大学の生涯学習センターでイタリア語も習っています。外国語であるイタリア語を外国語である英語で習うのはとても大変なことです。両言語の共通点や相違点が見えてきて、日本語の特異性にもたびたび気づかされます。受講生は私と先生以外は全員イギリス人なので、英語の勉強にもなります。さらに、自動車の教習も週に一度受けています。イギリスは日本と同じで左側走行ですが、交通ルールはかなり異なり、特に日本にはない環状交差点の進入が難しいです。また、マニュアル車しか選べず、教習の初回からいきなり一般の道路で運転しました。

休日は、サウサンプトンの市街地でショッピングしたり、近所の公園を散歩したりもしますが、正直なところ、サウサンプトンの街並みはあまり綺麗とは言えず、寂れている印象を受けます。また、ロンドンまではサウサンプトンからバスで片道2時間程度なので、まとまった休みがとれるときは良いですが、出費がかさむのであまり頻繁には行きません。私のお気に入りの場所はサウサンプトンから車で30分弱ほどのところにあるウィンチェスターです。イギリス最大級の大聖堂であるウィンチェスター大聖堂(11世紀着工)とその周辺の建物からは中世の雰囲気を楽しむことができます。大聖堂から徒歩20分ほどのところに、サウサンプトンの海まで伸びるイッチェン川の上流・中流域と、石器時代の遺跡が残る聖キャサリンの丘があり、自然に癒されたくなくなったときには必ずここに来るようにしています。



聖キャサリンの丘の麓にあるイッチェン川。

今後について

秋に博士論文を出した後は、まだ所属先などは未定ですが、ポストドク研究員として日本とイギリス両方にベースを置いて研究を続けられればと考えております。また、本レポートにて紹介しきれなかった私の研究活動についてはresearchmap (https://researchmap.jp/kaho_inoue)にて詳述しておりますので、そちらをご参考いただけますと幸いです。末尾になりますが、名誉あるBCJAのご支援を賜りましたことを重ねて厚くお礼申し上げます。

(2018年度 BCJA 奨学生 University of Southampton)

2018年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

留学レポート

野本和宏

1.ケンブリッジ大学院での留学について

まず初めに2018年度BCJA奨学生に選出して頂きましてBCJAの皆様には心より御礼申し上げます。

私は、国際協力銀行(JBIC)にてアジアを中心とした海外インフラ案件、北京事務所での中国政治経済の分析等のインテリジェンス関連、財務省主計局との間の予算折衝等の業務を経て、2018年9月に退職し、同年10月からケンブリッジ大学院公共政策修士コース(MPhil. in Public Policy (MPP))に進学し、2019年10月に修士学位を取得しました。

留学を決断した理由は主に、a) JBICでは海外向けファイナンス、政府機関ならではのネットワークを活用したインテリジェンス機能、国会・官庁との交渉、という主要業務の3つを不十分ではあるものの一通り経験することができ、今後のラーニングカーブと業務の新鮮さに不安を覚えたこと、b) 知的な好奇心を自動的に満たしてくれる恵まれた職場環境から離

れ、自ら他者(社会)に対して能動的に知的資本を発信できる基礎体力・方法論を身に付けたいこと、c) カナダでの高校時代や北京駐在時代に体感した「いつでも戻ることのできる」平和な母国を持つ生活スタイルから由来する精神的なゆとりや幸福度の高さを追求する上で、海外勤務を可能とする修士以上の資格が中長期的には望ましいこと、という三点になります。

その上で、ケンブリッジ公共政策修士コースを選択したのは、a) 幼少期より一貫して時事ニュースや社会問題といったビッグ 이슈に強い関心を有していたこと、b) JBICにてビジネスと政策の交わりに身を置いた経験より、富の創出・拡大よりは富の切り分け(公共政策とは妥当な現状分析を踏まえた妥当な優先順位の考案だと理解)の方に自分の関心が強かったこと、c) オファーを頂いたケンブリッジ、オックスフォード、LSEの公共政策コースの中で最も少人数で学費が低い(LSEは年単位学費は最も低いが、ロンドンでの生活コスト及び二年コースである点を考慮)、という理由になります。

ケンブリッジの公共政策修士コースは10月から6月末までを三学期に分けた上で、最初の二学期が座学とレポート執筆、その後のイースター休暇期間と最終学期は公的機関・国際機関でのインターンと修士論文(Independent Research Paper)の執筆に専念するというカリキュラムです。僅か30人足らずの小さなプログラムであるため、統計科目を除くと科目選択の余地はなく全て必修となり、ケーススタディ、統計学、経済学、公共哲学を柱としたディスカッション中心の内容であり、主要な政策課題や政策分析の方法論を網羅する一方、MBAと同様に特定の専門的知識を深掘り(研究)するという目的は置かれていません。3週間に1回程度の頻度で指導教官との間で修士論文等に関して相談する個人面談の機会があり、私は競争政策や移民政策等数々の分野で英国政府へのアドバイザーを務めたDiane Coyle教授から指導教官として色々と学ぶ機会に恵まれました。本コースにおいて個人的に特に勉強になった内容は、英国が政策応用という点で最先端を走っているナッジ(政策立案での行動経済学の応用)、ポピュリズムの理論的背景(移民の少ない日本ではよく悪くも殆ど議論されていませんが、これから日本も直面することになる問題)、ウェールズ財務省での所得税政策アドバイザー業務を通じて見た地方自治の現状になります。

上記の通り、短期間で多くのテーマでのレポート執筆を求められるコースのため、相当の時間をリーディングとレポート・論文執筆に費やす日々でした。ケンブリッジ大学では、学生が住む各カレッジに小さな図書館が設置されており、24時間自由にPCやデスクが使用できるため、各学期の終わりや修士論文提出期限前の時期はほぼ毎日図書館で執筆をしていました。そんな日々の中癒しとなるのが、美味しいコーヒー、自由に使えるジム、図書館の前の芝生で戯れるリスです。また、少人数コース故にクラスメートとは親密となり、お互

いのカレッジのディナー(Formal)に招待したり、軽くパブで飲んだり、小旅行に出かけたりしました。また、文系コースらしく統計学は苦手な学生が多かったため、皆で助けあったのも良い思い出です。また、広大なキャンパスではほぼ毎日ように何処かで著名な学者や実務者による講演会やセミナーが開催されているため、少ない時間をやりくりしてなるべく参加するようにしていました(これは普段あまりいかない他カレッジを訪問する良い機会になります)。一番のオススメは Cambridge Union (オックスフォードにも同様の Union があり、ボリス・ジョンソン首相を含め多くの政治家を輩出)というディベード学生団体が毎週開催する有識者を招いた討論会です。伝統のディベード議場は見学するだけでも必見の価値があります。

2. 日本人留学生の構成から見る課題

留学をして改めて感じたのが日本人留学生の歪な構成です。私は日本人会等に顔を出していなかったため、あくまで自分の観察と周りの学生からの見聞に依拠する主観ベースとなりますが、まず、学部・修士以上を問わず、他のアジア諸国(多い順に中国、シンガポール、インド、香港。その他ではタイも比較的多い)に比べて日本人学生は圧倒的に少なく、私のいたカレッジでは日本人は2名しかいない(訪問学者を除く)と言われていました。そして、修士ベースで見た場合、文系では 8-9 割近い日本人留学生がビジネススクール (Judge) に集中しています。そしてそのまた半数近くが社費留学(公務員、政府系金融機関、JICA、民間金融機関等)です。自費留学であっても、私を含めて大手企業等で一定年数のキャリアを持つ方々が殆どであり、若年層で海外留学する金銭的なハードルが高いことを示唆しています。ついては、海外留学を支援する奨学金プログラムが特に海外大学から奨学金が取りにくい文系コースにおいてより充実されるべきかと思います(最近拡充された柳井正奨学金や経団連奨学金は学部生や日本の大学在学学生に限るといった制限があり、海外で一般的なキャリアルートである学部卒→数年の勤務→大学院に対応しておらず)。

また、JBIC での業務にて外国政府と仕事をする中で感じていたことでもあります。日本の公的セクター(特に公務員制度)は海外留学制度を含む人事制度を抜本的に改革する必要があると感じています。私の所属したプログラムでは先進国出身の同級生は公務員でありながら全員が外部奨学金や自費で留学していました。G7 の一角を担う先進国として、いくら英語が母国語ではないといえ、公務員を年間数百人も税金負担で海外留学させる国は日本以外にありません。この制度は複数の問題点があります。a) 費用対効果が低い可能性がある — 現状の公務員海外留学は殆どのケースで実質的に留学コースを自ら選択できる(自分でオファーを勝ち取る必要はありますが)ので、転職に有利な MBA を選択する公務員が増えていますが、これは公的セクターでの業務と殆ど親和性がなく、海外勢からは率直にクエスチョンマークで見られています。b) 組織変革の阻害 — 全員で

はないですが、総合職採用であればかなりの確度で海外留学に行けるため、それ自体がモチベーションとなってしまうと同時に、留学というアメがあるからこそ、若手時代の過酷な残業や過度な年功主義に我慢する傾向が生じ、結果として組織文化や制度の改善を阻害している可能性があります。c) 外部の知を取り入れることのできない硬直的な採用制度 — 殆どの総合職に用意される海外留学制度を前提として、専門性(業務に合ったコンテキスト)、英語力や海外経験を採用時点では殆ど重視しない事務処理能力中心の旧来型の公務員試験が存続してしまっています(外部にいる専門人材を受け入れる代わりに内部人材を海外留学させる)。公務員試験を資格として認定する制度の弊害は民間企業や大学院で専門的教育を受けた人材を取り入れる経路に欠けることで組織が陳腐化するリスクです。このように海外留学制度が複雑性を増すデジタル社会や海外との絶え間ない比較考察が必要となるグローバル社会に馴染まない公務員採用制度を温存する理由となっていると見ています。ちなみに、日本では一般的な公務員採用試験は他の先進国の多くではかなり前に廃止されており、一般企業と同じ書類審査、面接にて基本的には採用をしています(外交官には語学試験等がある例はあり)。ケンブリッジのクラスメートでも米・英・豪・NZ の公務員出身者がいましたが、いずれも筆記試験での採用ではありませんでした。d) 最後に感じるのが、大臣や事務次官クラスの推薦レターを携え、フルに学費を支払ってくれる公務員留学生が毎年数百名程度いることによる民間人材のクラウドイングアウトです。日本人の海外留学生は総数として減少傾向にあります。世界トップクラスの文系プログラムで見た場合、根拠となるデータはありませんが、競争は激化していると感じています。ケンブリッジもそうですが、どの大学もダイバシティを保つ上で特定の国から偏らないよう配慮しています。つまり、競争が激しいトップクラスの大学ほど、日本人を受け入れる席数は限られており、その少ない席数を巡る競争でこれほど公務員出身者が多い国はシンガポールを除くと日本だけではないでしょうか。先進国としてその中長期的な弊害をよく考慮する必要があります。

3. 卒業後の進路—経済協力開発機構(OECD)での勤務

ケンブリッジ在学中に外務省が選考する JPO に応募し、2019 年 12 月よりパリにある OECD 本部にて農業貿易局(Trade and Agriculture Directorate)の Junior Policy Analyst として勤務しております。当初は北京勤務の経験を活かして、OECD にとって非メンバー国であるものの、Key Partner である中国関連業務を担当する部署での採用が予定されていましたが、その後、OECD 内で対中関係業務の規模が見直されたこともあり、上記部署にて、WTO で国際ルールの議論が進んでいる漁業補助金や漁業管理制度等の各国の動向を分析し、政策提言する業務に従事しています。今までとは全く異なる新たな分野ですが、ファイナンスと同様に数字を扱う補助金分析に加え、ブルーエコノミーという新たな分析枠組みでの議論にも参加し、そこではブルーファイナンス、

洋上風力発電や造船といった馴染みのある分野との接点もあります。また、漁業・養殖業の分野でも中国の規模は圧倒的であるため、各海域に存在する地域漁業管理機関(RFMOs)とも連携しつつ、中国政府へのアウトリーチにも取り組みたいと考えています。

OECD は国際機関とはいえ、その設立経緯や加盟国の構成からして非常に Eurocentric な組織であると感じています。スタッフも圧倒的に欧州出身者が多く、アジアからは加盟国である日本・韓国に加え、若干の中国人職員がコンサルタントとしている程度です。私の所属するチームも仏・英・伊といった欧州組が太宗を占めています。また、近年は他の国際機関と同様に主要国の厳しい財政状況とマルチラテリズム自体への懐疑論等の影響で予算制約が生じており、人事制度の見直しに加え、正規スタッフの代わりに多数のインターンや短期コンサルタントがオフィスに常駐していることも驚きでした。ここでも日本人職員は大変少ない点に加え、その構成も約 8 割は官庁(一部民間企業や業界団体)からの出向であり、その次に官庁からの出向者が多い韓国でも半数未満であることを考えると、日本の特殊性が浮かび上がります。将来的には、日本でも民間・国際機関出身者が霞ヶ関の管理職として活躍したり、またその逆(出向ではなく他国と同様に退職した上で正規スタッフとして転職)が主流となることで公的セクター内の知的資本が改善されることを期待しています。

OECD ではインターンでさえ修士号取得(又は在学学生)が必須のため、論を俟つまでもなくケンブリッジでの留学が現在のキャリアに繋がっています。また、職員の大半が修士号取得者であることに加え、大学院と同様に日常的に学術論文を読む機会があるため、大学院にいるのではと錯覚することもある程アカデミアとの親和性が高い組織です。しかし、最も恩恵を受けているのはケンブリッジ(通常はオックスフォードと共催)同窓会のネットワークです。パリでは友人も少ないため、毎月開催される同窓会は同世代の知り合いを増やす上で有益なネットワークとなっています。最後になりますが、BCJA 奨学生に選んで頂いた点を改めて御礼申し上げます。



(修士論文提出後にクラスメートとケンブリッジ名物のガーデンパーティーに参加)



(気分転換に度々ジョギング帰りに紅茶を飲んだオーチャード・テーカーガーデン。あのケインズも通っていたとか)

(2018 年度 BCJA 奨学生 University of Cambridge)

2018 年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

留学報告

酒嶋恭平

私は 2018 年度 BCJA 奨学生として、エディンバラ大学人文科学・社会学部歴史・古典・考古学学科修士課程(古代史専攻)にて一年間勉学に励みました。奨学生としてご支援いただいたことにつきまして、心より感謝申し上げます。この留学レポートでは、留学中の生活や私の研究について、簡単に報告したいと思います。

・学生生活

私の専門である「古代史」は、厳密に言えば、ヨーロッパ世界の古代史、すなわち、古代ギリシア・ローマ史に当たります。日本だと歴史学の一分野である西洋史の下位区分の一つに位置付けられ、「西洋古代史」と呼ばれますが、欧米では、古典学(Classics)の一つの分野に当たります。古典学とは、古代ギリシア語やラテン語で書かれた作品や史料、また古代ギリシア・ローマ人たちが残した考古資料を多角的に分析し、もって古代社会の諸相を解明しようとする学問です。古代ギリシア・ローマ史は、伝統的に古典学の一部として扱われてきたのですが、私もそれに則り、古典学科の古代史専攻を選択することになりました。

エディンバラ大学は人文学の分野では世界的に高い評価を得ている大学です。古典学に関しては、1583 年に古典語(古代ギリシア語、ラテン語)を文学士号の基礎科目として以来、400 年以上続く長い伝統を保持しています。しかし、私がこの大学を選んだのは、ここには私の興味関心に近いトピックを専門として研究されている教員が在籍されていたということ、またその方は、既に日本人を何人か指導した経験があり、出願前にお会いした時も非常に慣れた様子で接して下さり、この人の下で学びたいという思いを強く得たからです。

エディンバラ大学歴史・古典・考古学学科の修士課程にはいくつかのモジュールを履修して単位を得る科目履修コース(taught master)と、モジュールを取らず一年を通して書き上げた修士論文だけで成績が決まる研究コース(research master)とがあります。私は先述した教員の勧めもあって、科目履修コースを選択しました。第1 Semesterでは、古代アテナイの経済とローマの奴隷制に関する2つのモジュールを履修し、併せて、学部生配当のヘレニズム時代(紀元前323-紀元前30年頃)美術史の授業を聴講しました。第2 Semesterでは、ヘレニズム時代のギリシア史に関するモジュールを履修しました。また、両Semesterを通して古典ギリシア語購読のモジュールを履修しました。

授業に出席してみても驚いたことが2つあります。1つは、課程で学ぶ内容が驚くほどに体系化されているということです。カリキュラムは、学生が研究者を志すか否かを問わず、博士課程において博士号を取得し、一人前の研究者となることを最終目標として組まれています。そのため、まず学部生の時には古代史全般の知識と語学力を獲得すること、次に修士課程では一次史料(古代人が残したテキストや考古資料)を扱い、自分の議論を組み立てる技術を身に付けることが目標として設定されて、それに基づいて授業が構成されているのです。もちろん、日本の大学でも、段階毎の目標設定とそれに応じたカリキュラムはありますが、エディンバラ大学のそれは、より厳格です。数百年に及ぶ教授法発展の成果なのかもしれませんが、段階に応じた授業の提供を量的に可能にするマンパワー(学科全体で教員は80人以上、古典学だけで教員は20人以上)もまた、こうしたカリキュラム構成を可能にしているのでしょう。2つ目は、教授法の違いです。学生が30-40人以上出席する講義形式の授業であろうと、10人以下のゼミ形式の授業であろうと、講師は学生に積極的に問いかけを行います。さらに驚くことは、学生の方も自分が疑問に感じたことは直ぐに挙手して講師に質問します。どうやら、講師と学生間の対話が、授業中非常に大きな役割を果たしているようです。私はこれまで、講師の解説を静聴する形式の講義に慣れ親しんできましたから、エディンバラに来た当初は大きなカルチャーショックを受けました。それぞれの講義形式には一長一短あるので、どちらがよいという判断は下しにくいのですが、エディンバラの講義形式は、学生と講師の両方の集中を保つのに極めて有効なのではないかと感じました。

Semester 2が5月に終わると、次に15,000 wordsの修士論文執筆に入ります。修士論文の指導教員と相談の末、私はペルシア戦争の後世における受容の仕方を修士論文のトピックとすることにしました。ペルシア戦争とは、紀元前490年から紀元前479年にかけて、アカイメネス朝ペルシアがギリシア本土に侵攻し、古代のギリシア人たちがこれを排除した戦いです。この勝利は、近代においては、「自由」を礎とするヨーロッパ文明の起源とまで謳われ、この戦いを題材とした「300」というハリウッド映画も制作されたほどです。私は、この戦争がギリシア人のアイデンティティとプライドに重大な影

響を与えたこと、それにより、アカイメネス朝が滅亡した後(紀元前335年)も、古代を通して語り継がれていった、という点に注目したわけです。

ペルシア戦争の後世における受容に関しては、2000年代から活発に研究が行われるようになりました。これは、記憶の継承や政治化に関する研究、ヘレニズム時代・ローマ時代におけるギリシア文化の研究(とりわけ、古代ギリシア文化の黄金時代とされた古典期(紀元前507年-紀元前323年)に執筆された作品がそれぞれの時代にどのように受容されたのか、という視点からの研究)が1990年頃から盛んにおこなわれるようになったことと関係しています。更に、2010年は、ペルシア戦争における戦いの一つ「マラトンの戦い」から2500周年ということで、ペルシア戦争がギリシア世界に与えたインパクトが新たに注目されるようになりました。とはいえ、ペルシア戦争に関しては、未だ論じ切られていない箇所が多数ありますし、ペルシア戦争の記憶が戦争目的に利用されたことに伴う負の側面についても、未だ研究が不十分です。

私は、後世の歴史家の中でも紀元前1世紀に活躍した歴史家ディオドロス・シクロス(シケリアのディオドロス)の記述に注目することにしました。ペルシア戦争を書いた歴史家といえば「歴史の父」ことヘロドトスですが、ディオドロスはヘロドトスのペルシア戦争とは全くことなるヴァージョンのそれを記録しているのです。私は、ディオドロスのヴァージョンがヘロドトスのそれとどのように異なり、またその違いはどのようにして生じたのか、について論文を書きました。本論文は自分でも思っていた以上に完成度が高く、指導教員からは英文雑誌への投稿を勧められました。これは留学中最もうれしかったことの一つです。

・エディンバラでの生活

留学を終えてからエディンバラの日々を考えると、毎日が悪天候との戦いだったように思い出されます。「エディンバラは最高だよ。天気以外はね」という冗談はエディンバラに来たことのある人なら一度は口にするのではないのでしょうか。9月~10月頃から翌年の4~5月にかけて、北海から猛烈な東風が街に吹き込むのですが、そのためにとにかく寒いのです。私は冬の間に何度も体調を崩し、日本から持ち込んだ瓶一杯の風邪薬をあっという間に飲み切ってしまいました。冬の悪天候は春先から夏頃にかけて治まってきますが、今度は重い雨が降るようになります。冬が明ければ過ごしやすい季節が来る、と、エディンバラに留学経験のある先輩方から教わっていましたが、少なくとも私の留学中にそんな季節は来ませんでした。今にして思えば去年度は天候が悪かったのでしょう。

それから、日照時間にも苦労しました。エディンバラでは、ピーク時には、冬は日の出が午前9時、日の入りが午後4時、夏には日の出が午前4時で日の入りが午後11時となります。日の長さの変化にうまく対応できず、季節の変わり目には夜眠れなくなっていました。幸運なことに勉強に支障をきた

すことはほとんどありませんでしたが、睡眠不足からくる疲労が胃痛をもたらしたことで、胃薬が手放せなくなりました。

とはいえ、エディンバラは本当に素晴らしい場所でした。留学中は総じて勉強に集中できる幸福な環境に身を置くことができました。エディンバラは比較的治安が良く、人口もさほど多くないので、非常に暮らしやすい街であると言えます。街並みは綺麗で、歴史ある観光名所も多数あります。それから、大学の先生や出会った友人は皆親切でした。このような素晴らしい場所に留学できたのは、本当に幸運だったと思います。

・現在の状況

私は現在、新たに奨学金を頂くことができ、2019年9月よりエディンバラ大学人文科学・社会学部歴史・古典・考古学学科の、博士課程(古典学専攻)に進学いたしました。博士論文は、現在の予定では、修士論文の内容を拡大し、ヘレニズム・ローマ時代におけるペルシア戦争受容の歴史を検討することになっています。立派な研究者になって日本に帰国できるよう、精進する日々です。BCJA 奨学生の名に恥じないよう、今後3年間も、引き続き精一杯努力したいと思います。

(2018年度 BCJA 奨学生 University of Edinburgh)

2018年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

留学報告

鎌田彩花

私はBCJA 英国留学奨学金のご支援のもと、2017年から英国ケンブリッジ大学化学科に留学し、博士号の取得を目指しています。現在もイギリスに留学中のため、留学の近況を報告させていただきます。

研究内容

私の研究ではクモ糸などで知られるシルクタンパク質の線維凝集のメカニズムを調べるとともに、線維状凝集体を利用したタンパク質材料の開発を目指しています。私たちの身の回りには石油由来のプラスチックが多く使われておりその環境汚染が問題となっています。そのため多くの生分解性プラスチックやバイオマスプラスチックの生産が試みられてきました。一方で、自然界ではタンパク質から出来た材料が多く存在し、生物の様々な活動を支えています。特にクモ糸や蚕の糸に使われているシルクのタンパク質は高い強度・韌性の材料を作ること知られています。私の研究では、このようなタンパク質材料がどのように高い力学特性を達成しているのかを調べ、その知識を生かしてプラスチックの代替材料となるタンパク質材料を構築を目指しています。

私の指導教官は Tuomas Knowles 教授で、アルツハイマ

ー病やパーキンソン病などに見られるタンパク質のアミロイド線維凝集が専門です。研究室の多くのメンバーはアミロイド線維の研究を行っているのですが、私のようにタンパク質凝集を材料の視点から研究しているのは少数派ではあります。それでも、先生はこのテーマをとっても評価してくださっていて、また数人の博士研究員の方々にも支えられていることもあって、やりたいことを自由にできる環境が整っておりとても恵まれていると感じます。また、研究室のメンバーのバックグラウンドも化学・物理・数学・医学・工学と幅広く、何か困っていることがあっても研究室の誰かに話せば解決してしまうことが多かったり、全く違う分野の人と議論することで新しい研究のアイデアが生まれたりと、異分野の人が集まり一緒に働くことの価値を強く感じています。

生活一般

ケンブリッジは治安がよく、またロンドンから電車で1時間と便利な場所にあるため、身の回りで必要なもの、たとえそれが少し珍しいもの(日本食など)であっても簡単に手に入れることができます。その点、生活自体は日本との違いが少ない方かもしれません。

学生生活の過ごし方は学生次第かと思われます。私は分野を大きく変えたこともあり、留学の最初の1-2年間は研究と勉強にかなりの時間を費やしました。一方、ケンブリッジはカレッジ制度があったり、大学院生も積極的に部活に参加していたりするので希望すれば研究室以外の様々な人との交流の機会があります。3年目に入ってようやく余裕が感じられるようになってきたので、私も最近合気道部に参加するようになり、週に2-3回くらい稽古を行っています。

余暇は基本的には留学を始めた頃からずっと知り合いの学科の同期と過ごすことが多いです。去年は学科の同期と May Ball と呼ばれる年度末のパーティーにも少し奮発して参加しました(一晚のイベントに約200ポンド、日本円で3万円程度かかります...)。研究の愚痴やキャリアについて話合ったり、レポートの提出が近いときにお互いに励まし合ったりと私の留学生活に大事な存在でありいい友人に恵まれたことをとても感謝しています。

大学の現状

2020年3月にコロナウイルスがイギリスで流行してから3か月近くは大学の建物が完全に閉鎖され、学生は自宅での研究・勉強を余儀なくされていました。6月下旬からようやく大学の建物へのアクセスが可能になり、実験が必要な大学院生から優先的に実験が再開できるようになりました。

コロナウイルス流行以前の大学の様子を思い返すと、私は共同研究の始めやすさが印象に残っています。日本も研究室や大学に拠るのかもしれませんが、ケンブリッジの場合違う研究室の学生同士で盛り上がり共同研究がしようという流れになっても指導教官は基本的に認めてくれることが多いと思います。私も実際、たまたまイベントで出会った他の研究室の学生と意気投合し、共同研究を始めたことがありま

した。研究室同士の垣根が低いことは研究設備の共有の多さにも表れていると思います。私は材料系の研究をしていて、自分の研究室は材料専門ではないので多くの装置を他の研究室に使わせてもらっています。日本の研究室にいた頃はすべての研究設備が研究室にそろっていることが多く、その点は恵まれていたと思うのですが、こうして研究設備をいろんな研究室と共同で使うことにより、一つの研究室で幅広い研究が行うことが可能になっていると感じます。

留学と奨学金

日本の大学で学部生として勉強していた頃は、漠然と海外で学ぶことに興味はあったのですが、まさか自分が海外大学で学位留学をするとは思っていませんでした。それでも現在ケンブリッジ大学で博士課程をしているのは、日本の大学・大学院に在籍していた頃に少しずつ海外留学の経験を積んできたからだと思っています。特に修士の間にスウェーデンで交換留学をした経験は、学部の専攻である機械工学から、現在の専攻である化学へ分野を大きく変えるきっかけになり、またケンブリッジへの留学を決めた原点です。留学というと金銭的な問題がいつもつきまわりますが、私の場合、幸い多くの奨学金に支えられてここまで来ることができました。特に BCJA 奨学会のように分野や留学の種類に縛られず幅広く学生・研究者を支援して下さる奨学金はとても貴重だと思います。今後も多くの留学を志す方々が BCJA 奨学会の支援を受けて海外に挑戦されることを願っております。

(2018年度 BCJA 奨学生 University of Cambridge)

2018年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

留学レポート

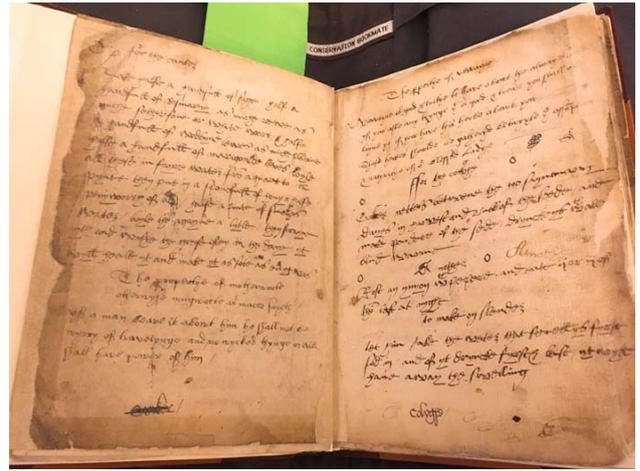
内藤茜

私は、BCJA 奨学制度によるご支援を頂き、2018年9月から2019年9月までキングス・カレッジ・ロンドン大学院の修士課程に所属しておりました。無事 Distinction (優等) の成績で修士号を取得し、昨年秋から日本に帰国し、英国系の民間企業に就職いたしました。留学前の不安の多い時期に BCJA の奨学生に選ばれ、自分の研究に留学する価値があると客観的に評価して頂いたことは大きな心の支えになりました。BCJA 英国留学奨学金審査委員会の皆様及びご支援頂いた BCJA 会員の皆様はこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

研究内容

私は初期近代のイングランドにおける戯曲出版について研究しておりました。キングス・カレッジ・ロンドンと大英図書館が共同で主催する修士コースだったため、授業の半分は

大英図書館の資料室で受けていました。



(写真)大英図書館でよく開いていた16世紀のレシピ本。未だ研究としては未熟な分野だが、医学と料理の歴史的な関連性や、女性が医学書に与えた影響等、研究の余地は大きく残されている。

世界でも有数の図書館で400年前の手記と睨み合う日々は、日本では決して得られない経験でした。この数百年間一度も封を切られていない手紙や、手書きのレシピの端に書かれたサイン、当時のスパイ同士の密通の証であるインクなど、現物を手にとって見る情報の量は計り知れず、これだけの年月が経っていてもなお解明されていない事実の多さを痛感しました。

私の修士論文では、ポーモント&フレッチャーの戯曲が1630年代の書店でどのようにマーケティングされ、どのような顧客層をターゲットとして販売されていたのかを中心に研究しました。これまでの文学研究では作者に焦点が当てられる傾向にありましたが、近年ではパトロン、印刷業者、販売業者など、テキストが流通するまでに関わる第三者に注目する動きが生じています。私の研究では1630年代の書籍商を3人取り上げ、それぞれのビジネスモデルを分析し、同じ作者の戯曲であっても販売戦略の違いにより書籍商のテキストとの関わり方が異なることを考察しました。

文学研究というと一般的には「作者」と「読者」という二つの立場のみが論じられるイメージが定着していますが、作者から読者の手に渡る間には多くの第三者が関わっており、それは今も昔も変わっていません。特に戯曲の場合は劇団、やその観客と、さらに多くの人を介しており、そうしているうちに作者が意図したものと全く別のメッセージを伝える作品になることすら十分にあり得ます。情報がどのように広まり、どのように受け止められ、それが社会情勢のどういった部分を反映した結果のものなのかを分析することは文学研究の重要な側面であり、それを英文学研究の最先端であるロンドンで直接学べたことの意義は非常に大きいものでした。

また、2019年6月にはテムズ川のほとりにあるランベス宮殿にて1ヶ月のインターンシップを経験しました。

イギリス国教会の大司教の常駐先であるランベス宮殿には13世紀から多くの貴重な資料が所蔵されてきた図書館があり、そこで第二次世界大戦の戦火で失われてしまった資

料データの復元プロジェクトに参加しました。大学院で学んだ知識を生かし、主に14世紀から17世紀の資料を一つ一つ手に取り、当時の持ち主のサインやページの端の書き込み等からどのような歴史を持った書物なのかを特定し、データベースに記録する作業でした。歴史資料の実践的な扱い方や、後世に歴史資料を残すために必要な見識を蓄えることができ、有意義な経験となりました。



(写真)ランベス宮殿の庭

留学生活

ロンドンで生活していく中で、大学院での研究以外ではほとんどの時間を劇場で過ごしました。ロンドンの演劇文化は非常に大衆的で、場合によっては一公演5ポンド程度で観劇することができます。学生や低所得層でも気軽に足を運べる場となっており、障がい者に向けた工夫も多く見られました。必然的に演劇作品の幅も広く、活発な競争が生まれ、劇場が議論の場としても発展していることがわかります。芸術があらゆる顧客層の日常に溶け込んでいる様子は新鮮で、昨年秋に日本に帰国してからというもの、同様の社会を日本でも作るために何が必要か、ということを考えています。

人文系研究の社会的意義や、現代の歴史研究が直面している課題、芸術と社会の関わり方などを直で学ぶことができたのは、BCJA 奨学金の支えがあったからこそです。改めまして御礼申し上げます。

(2018年度 BCJA 奨学生 King's College, London)

2019年度 BCJA 会計決算報告書 (2018.11.1～2019.10.31)

(一般の部)

収入の部

科 目	金 額
前年度繰越金	△410,394 円
年会費@2,000	122,000 円
合 計	△288,394 円

支出の部

科 目	金 額
ニューズレター	30,780 円
発送費	29,400 円
封筒代	3,940 円
アルバイト	60,000 円
文具	7,033 円
Web 更新費	16,848 円
合 計	148,001 円

2018年10月31日現在の資産状況

次期繰越 (a)	△434,395 円
----------	------------

(BCJA 奨学金の部)

収入の部

科 目	金 額
前年度繰越金	680,921 円
寄付金(38名)	675,000 円
合 計 (b)	1,355,921 円

支出の部

科 目	金 額
奨学金@150,000×5人	750,000 円
振込手数料	8,320 円
小計 (c)	758,320 円

2018年10月31日現在の資産状況

次期繰越 (b-c)	597,601 円
------------	-----------

2020年度BCJA奨学基金趣意書

2020年1月31日

BCJA 会長 青柳昌宏

BCJA 奨学基金は、2000年よりBCJA会員の有志の皆さまからの寄付金を基盤として、英国留学生の支援活動を着実に進めてきております。昨年度は、4名の留学希望者に対して、奨学金を授与することができました。

今年度も奨学生の募集を行いますので、奨学基金へのご寄付をお願い申し上げます。

記

一口 5,000円 二口以上でお願い申し上げます。同封の郵便振込用紙に、振込額、住所、氏名をご記入の上、下記口座宛にお近くの郵便局でお手続きいただければ幸いです。

ご寄附頂きました方々への領収書等の発行は特に致しておりませんが、必要であればご連絡、或いはご寄附の際に振込用紙にその旨、ご記載下さいますようお願い申し上げます。

尚、御礼状に関してはNewsletterにて代えさせていただきますことを御理解下さい。

口座記号番号:00180-0-426794

加入者名:BCJA 奨学基金

事務局 島津幸男

〒745-0004 山口県周南市毛利町 3-37-1-612

連絡先 Tel:090-8773-1024 Fax:0834-32-4030

e-mail:shimazu@herb.ocn.ne.jp

BCJAの銀行口座のお知らせ

金融機関名: ゆうちょ銀行

金融機関コード:9900

店番: 019

店名:0一九店(ゼロイチキョウ店)

科目: 当座

口座番号: 0426794

受取人名: BCJA ショウガクキキン

要注意!

総会参加費等、BCJA への振込時、ネットバンキングをご利用の会員の皆様には、次の点をご注意下さい。

振込先: ビーシージェイエー(BCJA)

2019年度BCJA奨学基金協賛者一覧

2019年10月現在

年会費納入者 56名(12.2万円) ※うち2名複数年度納入
奨学金納入者 38名(67.5万円)

協賛者氏名(敬称略 順不同):

橋詰浩平	山口昌子	町並睦生
安藤正海	山中健	長澤泰
安藤鄭之	時枝正	塚本泰
稲永清敏	小倉暢之	田中晋
横山俊夫	小池龍太郎	渡辺素子
岡井清士	小澤博	土井恒成
加藤久雄	新井民夫	島津幸男
河本直紀	諏訪部仁	難波光義
玉井俊紀	杉浦和朗	梅川正美
桂文子	西田宏子	萩原百合子
元川永善	青柳昌宏	白鳥令
広本勝也	石渡淳一	福田昇
荒木喬	草間芳樹	平健臣
高井清	多田稔	平田富夫
斎藤勉	大谷剛彦	米元純三
斎藤友博	大野吉弘	本吉邦夫
三浦省五	池浦貞彦	矢口宏
山下博	池田修	浪田克之介

BCJA ホームページについて

ホームページ担当

BCJAのホームページ<http://www.bcja.net/>では、過去のニューズレター閲覧、BCJA 英国留学奨学金、BCJA 活動状況、メンバー向け案内などがご覧になれます。幅広く有益な情報を提供できるサイトにするため、どうぞ皆さまからのご意見、ご希望をお寄せ下さい。

Google グループ[bcja]のご利用案内

Google グループ担当

BCJA 会員の情報交換、情報伝達などに活用していた
だくために、Google グループの中に BCJA 会員専用グル
ープとして、[bcja]グループを新規に設定いたしました。こ
れまでの Yahoo グループのメンバーの方は、登録内容を
移行しております。登録を希望される方は、Google へ登
録後に下記の URL にアクセスして下さい。

[https://groups.google.com/forum/?hl=ja#!forum/
bcja-member](https://groups.google.com/forum/?hl=ja#!forum/bcja-member)

または、masa_aoyagi5@yahoo.co.jp までメールでご連絡
をお願いいたします。
